



町の図書館を目指して



白老に私設文庫「みみの館」を開設へ

自身の子育てを通じて得た絵本と読み聞かせの魅力をも、私設文庫の運営や長年の読み聞かせボランティア活動で伝える松嶋珪子さん(85)＝札幌在住。「絵本の素晴らしさを大人にも子どもにも伝えたい。そしてみんなの憩いの場になれば」と、白老に私設文庫「みみの館」を開設する準備を進めています。

2019年に苫小牧市に私設文庫「宇宙船みみ」を開設。定期的に開放し、地域の子どもや親子の親しみの場となっています。ちなみに「みみ」はウサギの耳。「子どもたちの声がよく聞こえるように」との願いを込めています。

白老町の「みみの館」(大町3)は平屋建ての一軒家。リビングに設けた壁一面の本棚に約500冊の絵本や児童書をそろえ、開設記念に贈られた男の子の彫刻(元道展会員鈴木吾郎さん作)や絵画を飾り部屋を華やかにしています。将来は白老に移り住み、「みみの館」が宿題をしに来る子どもやお話しをしに来るお年寄り、一息つきにくる若者など、さまざまな年代の人が集う「もう一つの居場所」にしたいと考えているそうです。「当面は札幌から通い、苫小牧と白老で読み聞かせなどをしながら少しずつ開設の準備を進めていきたい」と楽しそうに話していました。



白翔中3年生がプレゼン

西の観光拠点・ナチュの森を活用した観光振興策

株式会社ナチュラルサイエンス

ナチュの森でキャンプをしよう／ライブラリーをおしゃれ空間にした本探しの旅／白老の食とのコラボでアイヌ伝統料理の提供／虎杖浜温泉循環バス「ゆたら号」の活用／施設の特色を押し出した満足感を与える石けん作りなど体験メニューの提案…

観光学を取り入れた地域学習の一環として重ねてきた授業の集大成としてのプレゼンテーション。生徒たちは白老の“西の顔”の同施設の魅力をあらためて学び、「こうすればもっといいんじゃない?」というさまざまなアイデアを提案しました。

本格的な見聞の蓄積

生徒たちは10月に入り実際にナチュの森に足を運び、スタッフの説明とともにつぶさに見学したり、北海学園大の講師で観光と図書館の融合について研究している松本秀人さんによる観光学の授業を受けるなど、学習・研究してきました。



思いあふれる提案

プレゼンでは、ナチュの「自然」「香り」「水のきれいさ」を生かしたキャンプ場を設け、さらにリピーターや新しい客層を呼び込む策、同施設の特色の香りラボを壮大なコーナーに改良するアイデア、自然の恵みと豊かな暮らしをテーマにした貴重な書籍数千冊の本をそろえるライブラリーの活用など、同施設の魅力を生かし、さらに白老が楽しい場所になるにはどうしたらいいか、そんな思いがあふれる提案が続いていました。

同施設関係者や松本さん、役場担当者、高校教諭、室蘭開発建設部職員など来賓からは「着眼点がおもしろい」「参考になる」「テーマ性に感心した」などとの声が上がっていました。(10月25日)

竹浦小で「ヒグマ教室」人とクマの共存を考える

講師の前田菜穂子さん(登別市カント・レラヒグマ学習センター代表)が、クマの生態やクマに出合った際の対処法などを話しました。「クマは森を育てる生き物です」と、人とクマの共存策のお話に見童からもさまざまな質問が寄せられていました。

クマが襲う原因は クマについての学びに50年以上費やし700頭以上のクマを育てたと話す前田さんは、クマの生態を見童らにも分かりやすく伝え、「基本的に人や動物を突然襲ってくるクマはいない。何かしらの原因があります」となぜ襲うのかを一つ一つ事例を挙げ説明しました。

クマに出合った際の逃げ方は 「クマに出合ったときにやると90%くらい助かるといいます」。走ると時速50kmともいわれるクマに出合ったら「決して背中を向けて走り出さず、手を頭の後ろに組んで背中を丸め地面にお腹をつけるという芋虫のような姿勢をしてください」と紹介。見童らも真剣に取り組んでいました。

見童からは「クマに味覚はありますか」「子どもから大人になり体の色が変わるのですか」「雄と雌の見分け方は」など質問が飛び交い、関心の高さを見せていました。(11月8日)

